第２節　昭和55年度調査の概要

昭和55年度は経済学部構内（ＰＬ.1－16)、農学部構内（ＰＬ.1－17)において事前調査および本部構内（ＰＬ.1－18)、農学部構内（ＰＬ.1－19）において立合調査を実施した。

経済学部構内では校舎新営工事に伴い調査を実施した。調査区は大学キャンパスの南部に位置し、構内地区割のＫ－21、およびＬ－21区にあたる。現地表面および青灰色粘質土の地山は調査区南西部に向って高くなっており、標高20.20ｍ～21.30ｍ、地山面標高19.20～19.60ｍである。水田客土下は木葉、自然木を含み砂層および礫層となっており、激しい湧水が認められた。調査区内においては顕著な遺構、遺物は認められなかった。

農学部構内では農業観測実験施設新営に伴い約50㎡について調査を実施した。調査区は大学キャンパスのほぼ中央部に位置し構内地区割のＱ－15区にあたる。現地表面の標高は約23.30ｍである。一般的に現地表下に堆積する厚さ約60～70cmの構内造成時の置土直下が黄褐色粘質土の地山となっているが、調査区南西部においては置土直下に上位から灰褐色粘質土、暗褐色粘質土の堆積がみられ地山へと続く。地山面の標高は南西部がやや低く約21.50ｍ、他は約21.60～70ｍである。検出した遺構は溝３条、土壙４基であるが各遺構からの遺物の出土量は極めて微量であった。溝は弥生時代のもの、古墳時代後期のもの、時期不明のもの各１条である。土壙はいずれも古墳時代後期を上限とするものかと思われる。

弥生時代に属すると思われる溝は東西方向に存在し、幅約40～60cm、深さ約10～18cmの規模をもち南部が北部にくらべやや深まっている。土壙には楕円形、五角形等の平面形態がみられる。規模は長軸90～100cm、短軸30～45cm、深さは約40cm前後のもので北部に偏在する。古墳時代後期に属すると思われる溝は弥生時代のものと思われる溝の南に位置し平行して走る。断面形態はおおむね「Ｕ」字形を呈し溝幅は東部、西部で約50cm、中央部で約100cmがある。また溝深は東部で約５cmを測り西部に向うにつれて序々に深くなり最大溝深約20cmである。遺物は周辺からの流れ込みと思われるものでそのほとんどが溝底より上位の位置から出土した。